

木のあかた山のくらし 工房もしかしたら



愛知県 北設楽郡 設楽町 神田
工房「もしかしたら」 宮本典幸さん
<http://mosikasitara.com/>



北設楽(きたしたら)郡設楽(したら)町は、愛知県の北東部「奥三河」と呼ばれる地域にあります。豊かな森林が大部分を占める人口約五千六百人の町です。
神田(かだ)地区は設楽町の南にあり

ます。神田地区で長年木工を通して木のよさを発信している、工房「もしかしたら」の宮本典幸さんにお話をうかがいました。

【はじめに、お住まいの神田地区についてお聞かせください。】

神田地区は、昭和25年には七百七十一人が暮らしていましたが、今は百三十五人まで減ってしまいました。若い人が都市へ出て行き、また、お年寄りの割合がずいぶん増えました。

【神田地区のくらしはどうですか。】

神田地区で、おじいさんの代から製材業を営んでいました。時代の流れで製材業が難しくなってきたからは、森林組合の仕事や電気の配電線保線の仕事をしたりしてきました。今は木工をやっています。結局ずっと山と木に関わる仕事をしてきました。

今は地区の区長と民生委員をやっています。一人暮らしのお年寄りが増えましたので、民生委員の役割は昔と比べて大きくなっていると思います。本当なら区長と民生委員は別の人がやれる

ばよいでしょうが、人手がないので私が一人二役をやっています。
「地域活性化」ということばをよく聞きますが、いつとき、よそから人が訪れてにぎやかになることよりも、となり近所が助け合って仲良く暮して、「ここで住んでよかった」と住民自身が思えるような集落になればいいと思っています。



静かな神田の山里。時々鳥の鳴き声が聞こえます

【神田地区には「神田冬まつり」という手づくりのお祭りがありませんね。】

神田冬まつりは今年で4年目になりました。地区住民の有志が「何かおも

しろいことをやってみよう」という気持ちで始めました。行政やその力を借りて観光目的でイベントをやるとなると、広報や受入体制などいろいろな義務が生じて自分たちがやりたいようにできないことがあります。なので、大げさにせず、観光目的にしないで、よその力を借りず、地区住民が自分たちで楽しむイベントにしました。

神田冬まつりは、イルミネーションを飾っています。去年のイルミネーションは消防団の火の見やぐらに竿をたてて、スカイツリーを作りました。なかなか好評でした。今年は何をやろうかなと思っています。上手いきますかどうか。ただ、自分たちで楽しむつもりなので、上手いかななくてもそれはご愛嬌です。

これからも、神田冬まつりは地区でやりたい人がやりたいようにやって、住民自身が楽しめればよいと思います。

【宮本さんの工房の名前、「もしかしたら」は面白いネーミングですね。】
浜松に住むある方が、アマゴ釣りがとても好きで、よく北設楽へ釣りに来ていました。釣りに来たときは一緒に

晩御飯を食べるなど親しく付き合っていました。ある晩、その方が「もしかしたらのしたらちよう(設楽町)」と言って面白がっていました。工房の名前をつけるときのこのことを思い出して、「もしかしたら」と名づけました。



【宮本さんは、これまでさまざまな活動をされております。いくつかお聞かせください。】

最初は、山に生えている木々から部屋に飾るリース作りを始めました。10年以上前のことです。その次に藤ツル

を使つてかご作りをしました。かごだけでは華やかではないので、フラワーアレンジメントの講座にかよつて、花かごをつくるようになりました。それから木の器を作るようになりました。自分が作るのには、飾り物ではなく実用で使えるものを作っています。定年で仕事をやめてからは、木を使つたいろいろなものを作っています。

スギ・ヒノキは間伐という作業が必要で、その際に間伐材が出ます。こういう端材を利用して、遊び場に置くようなベンチやブランコも作りました。



工房の庭には、花壇やベンチがありました

【工房にはチェンソーがいくつも置いてありますね。】

丸太の大きさによってチェンソーがかわります。チェンソーアート(※)をするときは、カービングバーという専用のチェンソーを使います。



お訪ねしたときは、イスをつくっておられました

(※)チェンソーアート
チェンソー(刃のついたチェーンを回転させて木を切る機械)を使って、丸太に彫刻をほどこして作品にする芸術をチェンソーアートといっています。



チェーンソーアート専用のカービングバー (右)
左のチェーンソーに比べて刃が細く、細工がしやすい形になっています。

平成12年にチェンソーアートを初めて見ました。その後「チェンソーアートをやってみたいか」と誘われて始めました。東栄町にできたチェンソーアートクラブには設立時から関わっています。
平成13年にアメリカのウエストポートというところで、チェンソーアートの世界大会があったので、視察に行きました。そこで、急ぎよ飛び込みで大会に出場することになってしまいました。カービングバーを持って海外旅行なんかしませんから、カービングバーは現地で買いました。これが結構高

かったです。そして、即席で日本の三重塔をつくったところ、現地の人に大好評で、飛び込み出場なのにとうとう部門第1位をとってしまいました。今から考えれば、日本人最初のチェンソーアートチャンピオンかもしれないですね。大会トロフィーをいただいたのですが、大きすぎて帰りのスーツケースに入らない。分解してやっと持ち帰ったのを覚えています。
【設楽町のとなりの東栄町では、チェンソーアートをする人口が増えて、今では毎年チェンソーアートの全国大会を開催するほどになりました。宮本さんは、日本チェンソーアートのほしりということですね。】

チェンソーアートで使うカービングバーはエンジンで動かしします。燃料は自然で分解する成分の油を使うルールです。このように自然に配慮した競技です。チェンソーアートは多くの人に理解していただきたいと思っています。
チェンソーアートをする人の中にはプロになった方もいます。ただ、作品は簡単には売れないので、プロで生活するのは大変だと思えます。私はプロ

にはなれません。
【ところで、東栄町の大会では、宮本さんの作ったランプシェードの作品展がありました。】
ここ数年はランプシェードも作っています。中をくりぬいた丸太に、糸ノコで明かり窓をあげ、和紙を貼ったものです。日本チェンソーアート競技大会 in 東栄では、花祭会館で「ふる里のあかり展」としてランプシェードを展示しました。



ランプシェードのあかり

これまでも、豊橋市の二川宿本陣資料館などで展示をしました。
ランプシェードは、ある日、中をくりぬいた端材を見て、行灯(＝ランプシェード)を思いついたのがきっかけです。最初に作ったのは田と月をモチーフにしたものです。



「第1号」のランプシェード

これまでランプシェードは三百個以上作っていると思います。



ランプシェードの材料は、中をくりぬいた丸太

も設楽町にある奥三河総合センターで「ランプシェードを楽しむ会」として製作講習会をやりま

【最後に、みなさんに伝えたいことはありますか。】

これまで、いろいろなことに手を出してきましたが、みなさんに一番伝えたいことは「山に関心をもってもらいたい」ということです。

【ありがとうございました。】

訪問日 平成25年11月5日(火)
取材者 愛知県新城設楽振興事務所
山村振興課 中村、渡辺



コスモスやヒマワリなど四季を感じさせます



工房にはランプシェードがたくさん！

愛知万博(愛・地球博)のときには、森林協会の依頼でモリゾーとキッコロをデザインしたランプシェードもつくりました。



細かい細工の蝶のランプシェード(左)。月見とうさぎ(右)はシェードが二重になっています

「こういうものをつくってほしい」と依頼されてランプシェードを作ることもあります。
ランプシェードからもれた明かりは「癒し」になります。細かい細工をするランプシェードからもれる明かりが暗くなるので自分好みではないのですが、お客さんは細工が細かい方が喜ぶようです。

ランプシェードを見たお客さんの中には、「自分でつくってみたい」という人もいますので、ランプシェード製作講習会の講師に出かけることもあります。ランプシェードは難しいデザインでなければ1日かければできます。12月に



ランプシェード展示の様子(愛知県奥三河総合センター)